

「姉妹親子」

50歳代グランプリ
古田 聡美



ミセス日本グランプリ
第6回ミセス日本グランプリ受賞者の手記

<http://www.mrs-nippon-grandprix.com>

はじめに

昔から、落ち込んだりするときには思い出す小さい頃の光景があります。夜、私と母だけが乗っている路線バスが、真つ暗な海沿いの道を走っている光景です。外は真つ暗でたまらなく怖く、母の手をぎゅっと握りしめています。私に頼れるのは世の中で母だけ、そう自覚する時です。

エッセイを書いてみないかと言われたときに、前々から仕事についての本は書きたいと思っていました。自分の生い立ちなどについてはかなり抵抗がありました。今の自分の環境や外見からは想像できないような環境で育ったからです。でも、五〇歳を過ぎて振り返るよい機会でもあると思います。途中はつらくて書けなくなるかもしれないと思いますが、それでも思い切ってペンをとります。

私は、今、福祉施設やクリニックの経営に携わる仕事をしています。職員は百二十名を超え、重責に押しつぶされそうになりながら、分刻みのスケジュールをこなすことも多々ある環境です。毎朝、すべての施設を回り、入居者・利用者に挨拶をしながら様子を見て

回ります。それから打ち合わせをして自分の部屋に来るときは十一時前です。いい言葉で言うと、はやりの女社長というところでしょうか？指にはネイル、そこその服装や髪形、一見華やかでよくいるお医者様の奥様が形だけの理事と思われそうですが、実は全く違います。性格はまさに男性ですべての施設設計から備品購入、銀行交渉、スタッフの雇用や指導、入居者の選定や面接、何から何までやっています。毎日いくつも指示をだし決済をします。時には厳しい人事をすることもあり、まさしく毎日が戦場です。でも、この仕事は嫌いではありません。

家に帰ると四人の子供のうち三人がいます。一人は県外で働いています。そのうえ、二歳の孫まで同居しており、母親がおばあちゃんに変わります。血液型A型の長女性格というのは厄介で、そんな私は、自分でちゃんとしなくては気がすみません。仕事もちゃんとする。家庭もしっかり守り子育ても厳しくしつける。疲れていても子供と一緒に風呂に入り、時には子供だけではなく主人の体も洗ってあげる、要するにそのようにしか生きられないのです。そのような性格になったのも、男性並みの仕事ができるのもやはり自分の生い立ちが影響していると思うのは私だけではないでしょう。

自分の人生を振り返るとき、大きく二つに分かれると思います。とても貧しくみじめで劣等感の塊だった結婚前と、それまでとは全く違う人生を歩むようになった結婚後。結婚

してちょうど二十五年が経過しましたが結婚したのが二六歳でしたので結婚前後の年数がちょうど一緒ぐらいになりました。ここらへんでいい加減結婚前の自分の劣等感を払拭するよい機会だと思えます。

両親の離婚

私が生まれたのは、高度成長期の始まりぐらいの年代です。田舎の農家跡取りの長男本家の初孫として生まれました。小さい頃の記憶は祖父にかわいがつてもらったことは覚えていますが、母に遊んでもらった記憶がほとんどありません。農家の嫁というのは昔から重要な働き手でひたすら朝から晩まで働いており子育ては祖父母任せだったようです。二歳下に弟がおり、両親と祖父母の六人生活が五歳まで続きました。当時から母と祖父母、父はうまくいっておらず、時には口論になり泣いている母の姿や、朝起きると母が嫁ぎ先を飛び出し実家に帰っていて姿がなく、泣きながら探し回った時もありました。私の中の母の顔はいつも曇っていて悲しそうな表情です。私が生まれたときは体力的にも元気で人の何倍も働いていたそうですが、私が三、四歳のころになると子供のころから患っていた中耳炎が悪化し、とうとう難聴になってしまいました。何とか、補聴器で日常会話程度は回復しましたが障がい者となり、それも相まって一層夫婦仲も悪くなり、修復しようと祖父母との同居を解消し、親子四人の生活が始まりましたが結果は無駄に終わりました。

一生忘れられない記憶があります。父との最後の日のことです。晩御飯を四人で食べていると些細なことで父が怒り出し、食べ物投げつけ窓ガラスを割りました。その剣幕に母は怯え思わず家を飛び出しました。父は、バイクに乗り三歳の弟を後ろ座席に乗せました。そこで、たった一人残っている当時五歳の私に「聡美も乗れ」と命令します。怖くてたまりませんがなぜか初めて反抗して、言葉も出ないまま首を横に振り頑としてその場をうごきませんでした。泣きながら「行かない」と声を振り絞ったと思います。後で思うとその時に自分の人生を自分で決めたことになります。とうとう父は根負けして、弟のみ連れて実家に戻りました。それが父との別れになりました。それは、小学校入学前の夏だったとおもいます。大きな心の傷として残っていたのだと再認識したことがあります。それは、私が母親となり長女が五歳になったころ、ちょうど「その事件」があった時期になったころ、私は気分が沈むようになりました。理由がわからないまま、毎日が憂鬱になり笑えなくなりました。そして、ふっと当時のことを思い出し涙ぐむことがたびたびありました。その時に改めて、子供のころに受けた心の傷の大きさを思い知りました。内容は違いますが虐待されて育った人が同じように虐待するという「虐待の連鎖」もわかるような気がしました。要するに育ったようにしか育てられないということもあるのかもしれない。

それから、一層母の顔から笑顔が消えました。よく奪われた弟のことを思い泣いている姿もあったと思います。その影響を私が受けないはずもなく、私はあまり笑わないかわいくない子になりました。生活の糧を得るために私を置いて母は仕事に出るようになりましただ。ある時などは、夜の九時を回っても母は帰ってこず、食べるものもなく、ずっと何時間も泣きながら暗い部屋で待っていたり真っ暗な外に出て近くを探し回ったりした記憶があります。そのような記憶はそれから何度もありました。

当時は、離婚も少なくまた、今のように母子家庭への援助もない時代でしたので、母子二人生活していくことは大変な時代でした。世間の風当たりも強く、子供の私に向かって「片親の子はまともに育たない」と言い放つ方もいました。幸いに母の両親、もう一方の祖父母が健在でしたので、いろんな援助をいただき何とかやっていけたというのが現状です。大人になり、自分が母親になって客観的にどうして私の母は大切な子供を手放したのかと責める気持ちが出てきたことがあります。

でも、当時はまだ家や親族の力が強く、たとえ母が二人育てたいと言い張っても障がい者でもあり就職口も少なく、無理だと判断され、跡取りが必要な父のほうがいいと判断されたが無理矢理納得しました。

弟

離婚して一年も経っていないと思います。当時住んでいたところを引き払い、隣町の製材所に住み込みで二人で暮らしていました。ある時、その母に連絡が来ました。弟がいなくなっただけというのです。驚いた母はとるものも取らず慌てて弟を探しに別れた夫の実家に行きました。近所総出で探したところ、三歳の弟が母を探して家出をして、以前親子四人で生活をしていた場所を求めてひたすら歩き遠いところで見つかったということでした。履いていた靴はボロボロになり、足は傷だらけ、とてもひどい状況だったと聞いています。それを聞き、胸が引き裂かれそうな思いでした。幼心にも母を求め、会えることを願って探し求める弟の心情を思い涙が止まりませんでした。

その時に私は心から願いました。「どうか、弟と暮らせませう」と。母が弟を強引にでも連れてきてほしいと心の底から願いました。私にとって弟は何物にも代えられない宝物のような存在で、急に奪われた悲しみと寂しさを抱えていました。泣きながら帰ってきた母の後ろに弟の姿はなく、その後一緒に暮らすことは二度とありませんでした。

父と弟が出ていった後、離婚に向けて親族会議が開かれたそうです。当初、何の資格もない上に耳が悪い母には、子育ては無理だろう、せいぜい自分一人の生活が精いっぱい

はないかとの意見も出たそうです。その時に、母方の祖母がこれからひとり生きていく母が不憫で、せめて生きがいには娘だけでもそばに置かせてやりたいと一生懸命説得したと後から聞きました。そのおかげで私は母と一緒に生活することができました。もし、その時に私が父に引き取られていたら、父に初めて反抗して残ったあの別れの時に父が無理やりにも私を連れ出していたらと想像するとぞっとします。とうてい私はまともに成長できなかつたのではないかと思うのです。今思っても私はとても感受性が強く人見知りもあり、難しい子供でした。きっとかわいげのない子供だったと思います。父はすぐに再婚したのですが、私は到底、義理の母とうまくやっていけるはずもなく、非行に走っていたか精神のバランスを崩していたとしか思えないのです。

でも、私はまだ弟に比べるとはるかに恵まれていたと思います。弟はとてもやんちゃで手が付けられないような子供だったので、後妻の母とうまくいくはずもなく、ずっと孤独感と疎外感を感じながら育ったと後から聞きました。父には、「お前は母に捨てられたのだ」といわれて、母を恨んで育ち、その結果はお決まりの非行。幸いに何とか高校も卒業でき就職、結婚、子供に恵まれたと聞いています。ちゃんと育ててくれた義理の母にはほとんどあったことはありませんが心より感謝しています。

両親が離婚した当時から、私は、町で離ればなれになった三歳当時の男の子を見ると自然に涙が出てくるようになりました。当時の弟の姿と重なり、たまらない気持になり涙があふれてきます。それは、成人するころまで続き、自分が男の子を産んだらちゃんと育てられるのだろうかと不安に思うほどでした。それほど、私にとって弟は大切な存在で突然、奪われた心の傷は大きかったです。それゆえに、私は離婚するとき子供をそれぞれ別々に引き取ることは絶対に反対です。子供は大切な一方の親を亡くすと同時に大切なきょうだいでなくなってしまう大きな悲しみを負ってしまうからです。それが心の成長に及ぼす影響はとて大きいと自分の実体験から思います。弟をずっといとおしく思いながら、その思いは弟に通ずることはなくいまだにきょうだいで会うこともできない状況です。三歳であった弟には姉の思い出など皆無かもしれませぬ。

二人家族

その後、母と私は、全く見知らぬ小さい田舎に移りました。遠縁にあたる親戚が小さな村で製材所を経営しており母はそこに住み込んで仕事をすることになったからです。小学校一年から四年生までです。振り返ると初めて落ち着いた生活ができた時代だと思います。一人っ子になった私は弟が恋しくてたまらなく、それを紛らすように想像豊かな子供になり

ました。想像の世界に飛び込むことで現実逃避していました。いつも学校から帰ってくる
と一人でしたが家が製材所の二階だったので、母に会えなくても下で働いている安心感
はずっとありました。離婚で精神的に参っていた母も次第に元気になり笑顔が見られるよ
うになりました。職場仲間にも恵まれ母が精神的に落ち着くと同時に私も普通の子供らし
くなったように思います。友達とも遊び近くの川などでもよく遊びました。ただ、時々母が
隣町の病院に出かけると帰りが遅くなり、寂しくて泣きながらバス停まで何度も足を運
んだ記憶があります。次第に暮れていく風景にたまらなく怖く悲しく母が恋しく泣くしかな
かったのです。時には、一緒に出掛け最終バスの中二人っきりの乗車で外は真っ暗で怖く、
母の手をずっと強く握っていたその光景が冒頭に書いた光景です。

小学校の五年生になると、母の実家の近くに引っ越ししました。祖父が小さいながらも二
人で過ごせる家を建ててくれたからです。近くには、大きなブドウ園を経営している伯父
家族がおり、年の近いいとこたちもいました。転校してから学校にはなじめず、いじめに
もあいつらい思いもたくさんしましたが、いとこたちとはとても仲が良かったし今でも親
しくしています。小学校卒業が近くなった頃から、母の体調が悪くなってきました。働き
に働きずめだったから無理もなかったかもしれなません。慢性的な疲労が重なり、以前に
耳の手術などとして輸血もしていたためか、肝臓を悪くしたのです。それも自己免疫疾患
の病気ですから、亡くなる十四年間は入退院を繰り返す生活でした

差別

聴力障害というのは、外見からはわかりにくい、それがどう反映するかは時と場合によります。中学校のあるとき、母が同級生の男の子の家に入っている姿が見えました。私も後を追うように入っていきそつと母の姿をのぞいてみると、当時化粧品販売をしていた母が同級生のお母さんに化粧品を売っています。きつと生活が懸かっている母は半ば強引に売っていたのだと思います。やむなく一品だけ買ったその方は、近くにいた近所のおばさんと一緒に母が耳の聞こえが悪いことをよいことに、母の悪口を本人の前でさげすんだ表情で話しています。母は聞こえずニコニコと対応していますが離れたところで見ている私にもそれは聞こえるぐらいでした。一生懸命に働いている母の姿をあざけるような内容だったと思います。それを聞いて私はたまらなくみじめな気持ちになったのです。決して母を恥ずかしいだか思ったことはありませんが母がかわいそうでたまりませんでした。泣かないように努めながら、私はその場所に入っていき早々に母を連れ出しました。

時々、母子家庭の私に「よく非行に走らなかつたね」という人がいます。確かに母と一緒に過ごす時間は少なく、寂しい思いも悲しい思いもずいぶんと味わった子ども時代でし

だが、母が私を生きがいにたった一人で一生懸命働いて生きていることは、子供でも十分理解できませんでした、いつもその後ろ姿を見てそだちました。その姿を見て、これ以上心配かけるような非行に走るほうが私には理解できませんでした。いつも私は絶対に母に心配をかけたくない、いつか母に楽をさせたい、母が自慢できるような娘になりたいとそればかりを考えていました。私も人並みに反抗期があり随分、母に反抗し口答えをして困らせた時もあったのですが、その程度で、その時ですら、母を裏切るようなことは絶対にできな
いと思っていましたし、母の絶えることのない深い愛情は痛いほど理解できました。

愛情深く子供が大好きでいとこたちもとてもかわいがっていました。耳が悪かったこともあり時には突拍子もないことを言ったり、場違いな発言があったり、子供心にそれが不憫で早く大人になって守ってあげたいと強く思っていました。

進路

母の実家の近くに引っ越してからは、親戚関係のしがらみが窮屈でたまりませんでした。が、いざ母が入退院を繰り返すようになってからは助けてもらい感謝の気持ちでいっぱいです。でも、いつもお世話になっているからと肩身の狭い思いをして育ちました。そして、

それは私の進路問題にも影響してきました。母が病弱になり働けない日々が増えるようになる。生活はいっそう苦しくなり、今のような焼肉やお寿司などという贅沢な食べ物、高校を卒業するまで、ほとんど食べた記憶がありません。たまに玉子焼きがでるとご馳走だとしても喜んでいましたし肉料理などは、めったに口にすることはありませんでした。自宅が母の所有であったため、生活保護をもらうこともできずいつも大きくなったら毎日チョコレートを食べるのだと夢を見ていました。その貧乏な生活はいっそう自分の劣等感を強め世の中を斜めに見ていた思春期だったと思います。どう考えても貧しさからは抜け出せず、その唯一の方法は、自分が勉強して将来よい職業につくだけだと思っていました。高校進学時、地元で一番の進学校を受験したいと一族の家長である伯父に話したところ、「どうせ大学はいけないのだから、就職が多い高校に変えなさい」と言われました。惨めでたまらなかったのを覚えていきます。中学校の担任に話をするかわざわざ自宅に来てくれて伯父を説得してくれ、そのおかげで大学進学をしないと言う条件で希望する高校を受験することができました。むろん滑り止めなど受ける余裕もなく一発勝負でした。奨学金を借りることができ、希望の高校に入れたことはうれしいことでした。

当時は、高度成長期の後半でバブルが始まる前の時代で全体がそれほど豊かではない時代です。今のようゲームがあるわけではなく子供のおもちゃが高価なものではなかった。で、まだ貧しさのイメージやそれによる惨めさはその程度で済んだと思います。今の時代

であったならばその惨めさは昔の段ではなかったと思うのです。いつそう惨めさを痛感し、ひねくれていたと思います。日本の社会は学歴社会です。それが自分にはありがたく思いました。チャンスがあるからです。たとえば身分制度のように個人の努力ではその生活レベルから抜け出せない世の中であつたならば貧しい家庭は子供のころから夢や希望が抱けません。でも、今の時代は何とか勉強と言う努力によつて学歴を身につけたらこの貧しさから抜け出せるチャンスがあります。勉強しかないと強く思っていました。そうかといつて勉強しても大学にはいけないと言われている状況があり、むなしさを感じながらの高校生活でした。母はなるべく私に惨めな思いや肩身の狭い思いをさせまいとよく服を縫ってくれたし料理の工夫もしてくれました。

高校生活は、太つてブスで暗い女の子だったのでもてるはずもなく、劣等感にいっそう拍車をかけることになりました。そのせいかあまりよい思い出がありません。高校三年生の時、親友ができました。彼女はいつも明るく誰からも好かれていました。その子からある光明思想系の宗教の影響を受けました。やがてはそれから離れることになるのですが、その教えは私にとっては大切なターニングポイントでそれまで、根暗で素直ではなくひねくれていた私の心は、反省や物事の考え方の転換によりどんどん明るく変わっていきました。とにかくこのままではいけない、自分を変えなくてはならないと毎朝、ネガティブな気持ちがあわきそうになる心と一生懸命戦っていました、常にポジティブな書籍を読み、よ

い思いのみを考える努力をたゆまずに続けました。そのおかげで今の自分があることも事実です。

高校卒業後は就職しかないと思っていましたでしたがどうしても進学したかったので。お金が要らない方法はないかと調べ、高等看護学校の入学にたどり着きました。当時、授業料が安い寮生活完備の看護学校が自宅から電車で2時間ほど離れている県庁所在地の市にあり、あまり母に負担をかけなくても進学できると考えました。看護師になって母の看病をしたいという気持ちも強くありました。その看護学校は、公立病院の附属のような学校で、県や市、病院などから奨学金を借りることが可能でした。就職もしやすくかなり人気のある学校でした。当然、入学競争率は高く国立大学進学程度の実力がいると言われていました。母は昔から、自分が手に職がないために十分な職業に就けなかったことを嘆いて私には手に職をつけさせたい、いつの時代も生活に困らないためにはその方法しかないと言っていました。そのために看護師になることをとても喜んでくれました。あれほど進学に反対していた伯父も迷惑をかけない条件で説得することができました。当時の私の成績レベルではかなり難しい状況ではあったが幸いにも無事、進学することができ、それとも母の元を離れることになりました。ずっと二人きりの生活でましてや病弱な母のことが気になりましたが、それよりも新しい生活が始まる期待のほうが大きかったことも事実

です。しかし、その期待はことごとく裏切られました。甘えて育った私は、三年間厳しい寮生活に根性をたたきなおされることになりました。

看護学校

看護学校の最初の一年間は軍隊のような厳しい規則正しい生活に息が詰まりそうでしたし、あまり友人もできず孤独感でかなり精神的に追い詰められていきました。朝六時半の点呼、朝会、掃除、先輩方へのあいさつの仕方から態度、昼食を先輩の分まで作ることや入浴、洗面の方法まで厳しく注意され、歯磨きする時のうがいする水の量まで決まっていました。母と二人のんびり、わがままに育っていた私は、その集団生活がかなり苦痛で耐えがたく、長期休暇になることを何ヶ月も前から指折り数え、土日になると無理をしても帰省し親戚から電車賃がもつたいたないと反感を買い、月曜日になると帰りたくなくて体の調子が悪くなり休んだりしていました。つらくてたまらず、学校を辞めることばかりを考えていました。でも、ここでやめるとこの貧しい生活から抜け出すチャンスがなくすことになります。母の生活を楽にさせることもできません。石にかじりついてでも頑張るしかない、そう言い聞かせ苦しい一年を過ごしました。後の二年間は何とかなじめることができ、最後の一年は副寮長まで経験するほど積極的に目立つ存在になっていました。ここ

でも多くの方の応援をいただきました。経済的な問題を抱えていることを看護学校の教員は察していたのでしよう。長期休暇になると附属の病院のアルバイトを紹介してくれました。注射器や撮子を洗う中央材料室や外来などです。たった一人で寮に残ることも許可してもらい生活の糧を得ることができました。アルバイトでもっともよかったことは、アルバイトは毎朝、総師長室で出勤簿に捺印を押してから現場に向かいます。嫌でも総師長に毎朝会うことになりました。やがて私はこの附属病院の入社試験を受けることになるのですがその面接官の代表がこの総師長でした。私は、内定一番でしたが、成績順での採用と言われ、それは、顔見知りであった総師長の面接点が大きかったのではないかと勝手に思っています。

その看護学生の中に、一層母の具合は悪くなり、もう地方の病院では治療の方法がなく私の住んでいる市にある大きな大病院に紹介入院してきました。そのため、その後はずっと母が亡くなるまで、学生の時は学校、寮、母の入院している病院の行き来で過ごし、就職後は職場の病院と住んでいるアパートと母の入院している病院の往復でした。私は、奨学金の借り先を増やすことができ、何とか学生を続けることができました。

看護学校を卒業することになり、母は私の成績から助産師学校の進学を進めてきました。当時、助産師【当時は助産婦】になる学校は、大学の附属助産婦学校が県内に一校あるかないかの状況で他県からも受験に来るほど入学競争率が高い学校でした。看護師の国家資

格に合格し資格を取らなくては助産師学校には入学できず、看護師の国家試験と助産婦学校の入学試験が同じような時期にあるといふかなり厳しい状況で勉強に迫られました。奨学金を出してくれた病院や県・市は助産婦学校の卒業まで返済を待ってくれたのでありがたかったです。助産婦学校も大学病院附属の寮生活で、嫌でたまらなかつた寮生活を結局足かけ四年も送ることになりました。

就職

無事、助産婦の国家資格も取り、病院に就職して、念願の仕送りが母にできるようになりました。就職時、新しいアパートを借りるために祖父母から借りたお金もその年の賞与で返済できました。やっと母を楽にさせてあげられる。その喜びと安堵感は何物にも代えられませんでした。母にとっては、私の職業や職場は自慢だったようですし、喜ぶ母の姿を見ることが何よりうれしかったです。

初めて配置された職場は周産期センター新生児部門で日本でも有名な最先端な高度医療を行っており、その病院の中でも最も厳しく多忙な職場と言われていました。そこに新人として配置され厳しくも十分な教育を受けられたことは今になって振り返るとなんとあり

がたいことだと思えます。所属初めての部署の師長の影響はその後の働き方に大きな影響を与えるところかもしれませんが、私の最初の師長は、やがて総師長になるほどの、かなりやり手で情熱家、厳しく看護の精神をたたきこんでいただきました。その師長が就職後三年間は仕事一本でもいいのではないかと新人のところに話してくれた覚えがあります。私はその言葉に同感し、一人前になるまでは仕事を第一とし、そのほかの恋愛など考えまいと決めました。その経験がその後の人生において次のステップの元となり、やがては小児看護を中心とする大学教員となれたと思います。

仕事が休みの日は、必ず母が入院している病院に見舞いに行くのが日課でした。母の病気は心臓を弱らせ、集中治療室に入ることもしばしばでした。私は、二六歳になっていて、その頃の母の一番の気がかりは、私の結婚だったと思います。

離婚した両親のもとで育った子供は結婚に対していろんな思いを描きます。結婚に失敗したくないために慎重になったり、現実的に冷めて結婚に憧れを抱かなかつたりなどです。私の場合、とても結婚に憧れがありました。絶対に結婚に失敗したくない。母のように苦労したくないと強く思っていました。母ができなかった幸せな家庭生活、望んでも決して手に入らない両親の存在、子供の両手にはそれぞれに母の手と父の手が繋がれている。そんなイメージをずっと子供のころから描いていました。独身時代、一人ぐらしの私はいつ

も孤独感を感じていました。それは子供のころの一人で留守番ばかりしていた影響があるのかもしれないし弟を奪われた寂しさ、虚無感などがあったのかもしれないと思います。仕事が終わり母の入院している病院に面会に行き、アパートに帰る頃は外は真っ暗闇です。その道をかえりながら寂しくて涙が溢れそうになることは一度や二度ではありませんでした。恋愛は私にとっては即、結婚でありそのためになんか軽く男性と付き合うことなどできませんでした。その頃は、仕事の激務もあり年頃でもあったので、体型は普通か少しやせ気味のほうでした。顔も小さくなり、やせたおかげで目も二重で言うのもおかしいですが、ブスではありませんでした。多くの男性に声をかけていただいたと思うのですが、若い女性ながらの浮いた気持ちにはなれません。私の肩には母との生活が懸かっていますから。

主治医

母の入院している病院は、近くの大病院から研修医が派遣される制度があり、母の主治医は何人もの研修医がかわるがわる担当していました。その中に、母がとても気に入った医師がいました。「今度の主治医の先生はとても優しい」とよく言いました。その上に「独身よ」と意味ありげに私に話すときもありました。病院で働いていると医師たちのい

いところも悪いところもよく見えてきます。みんな仕事熱心で素晴らしい医師ばかりですが、若い医師は結婚していても中には看護師たちと遊ぶ人もいらして、心の中で医師だけは結婚したくないと思っていました。仕事は忙しい上に、周りは若くてきれいな看護師ばかり、奥さんたちはどんなに心穏やかではないだろうと思っていましたし、声をかけてくださる先生もいてそれがたまらなく嫌で、私の医師嫌いは根深いものがありました。ましてや職場恋愛など私には絶対には考えられないことでした。職場は仕事をするために行くところで仕事は、人の命がかかっている真剣勝負の現場です。そこで恋愛感情など沸くはずもなく、たくさん看護師がいて医師との恋愛沙汰が噂話に聞こえるたびに、心の中では軽蔑すら感じるような堅物の人間でした。そういう経緯から母がその医師をととても褒めても興味など持つはずもなかったのです。

ある日、母の具合が悪くなり、急に集中治療室に運ばれました。私は、仕事が終わるとともに急いで病院に行き、主治医に説明を求めました。今でも覚えています。夕方、日が沈みかけて夕日が病棟に差し込んでいます。いつも母が褒めていたその主治医と初めて顔を合わせました。真面目そうな顔だが全くタイプではない外見です。顔はホームベースのような大きな顔で小太り、大きな目に、眼鏡にくつつきそうな長い睫、表情はとても優しく、一目で患者から人気があることはわかりました。その主治医から「いつ何があるかわからない。覚悟してください」と母の病状のことを宣告されました。なんと厳しいこ

とを言う医師なのだろうと不快に思い、その顔を半分睨むような表情になったと思います。その言葉に思わず涙が溢れて慌てて涙をぬぐいました。主治医はその涙を流す顔に驚いたような困ったような表情をしました。それが今の主人です。最悪の初対面でした。

幸いに母は、その時は回復し無事集中治療室から一般病棟に移ることができました。その母の口癖は主治医がいかに優しく真面目で素晴らしい医師であるか、褒めることになってしまっていました。病状が回復したことが一層拍車をかけたようです。ある日、母は私に「とてもいい先生だと思うけれど、あなたはどうか？」と聞かれました。私はあっさり「タ イプじゃないから、興味はない」と即答したのを覚えています。私のその厳しい言い方は、それは男性の理想の高さに結び付き、母は半ばあきれていて言葉を失っていた様子でした。大学病院の研修医は当時三カ月から半年の期間で交代になり、大学病院に戻る制度になっていました。

あるとき、私が母と一時外出をして母を病院に送っていくと、その主治医が「実は今日で、大学病院に戻ります」とあいさつに来ました。母が外出から戻るのを待っていたと聞きました。最後の挨拶をしたかったのでしょうか。その姿に母は感激し何度も深くお礼を言っていました。何となく、その主治医は母ではなく私を待っていたような様子に感じましたが気のせいだろうと思いました。よい先生だけれども二度と会う機会はないと思いました。主治医とも別れの挨拶が終わり、私も帰る時間になりました。母がいつも私の姿が

見えなくなるまで病室から見送ってくれます。その道を帰りながら、もうあの主治医の姿を見ることはないのだと改めて思いました。すると、急に動けなくなってしまうのです。胸の奥が痛むのです。それは生まれて初めての経験でしたが、胸の奥底から何かが胸をたたくような痛みに近いものでした。胸の奥から『あの人よ、結婚相手は』と声が聞こえたような感じを受けました。最初で最後の経験でした。よく結婚相手に会ったときにピンとくるという話がありますがそれに近い感覚だったかもしれません。後で聞くと初対面の時に主人のほうにピンと来たそうです。その体験は魔訶不思議な体験でした。でも一瞬の出来事で「まさかね、私の思い過ごしよね」と自分に言い聞かせ、気を取り直して歩き出しました。そして、その一瞬の出来事はすぐに忘れてしまいました。

お礼

ある日、母が「あの先生はとてもいい先生だったから忘れられない。あなた、お礼に商品券を送ってくれない？」と言いました。母は言い出したらひきません。「わかった、わかった」といいながら、先延ばしにしています。当時、バレンタインデーも近づいていて、母は、バレンタインのチョコも買って一緒に同封して送って頂戴としつこかったのです。そこでお礼の言葉を添え、私の住所と母と連名で送りました。そして、送ったことすら忘れていました。当時は夜勤もあり仕事は激務で責任も大きくひたすら仕事一筋だっ

たので余計なことを考える時間はありませんでした。時間があると学会発表や研究など業務以外のことも多く、時間に追われていてそれはそれでとても充実していました。そのため、ある日手紙が自宅のアパートのポストに中に入ってもそれが誰なのか、宛名を見てもなかなか思い出すことができずにいました。中身を読んでいくうちに母がお世話になった主治医だと思いだすのに時間がかかったほどです。その手紙は母の病状を思いやる言葉と贈り物のお礼の言葉、そして、なぜか電話番号が書かれていました。

当時は、携帯電話などまだない時代でしたので自宅電話番号が書かれていても電話などしにくいし第一、電話をする理由もありません。不思議に思っていると以前、胸を打った不思議な体験を思い出し、もしかしたら、“縁があるのかもしれない”と思い、自分の電話番号を書いて手紙を出しました。それから電話が来るようになりました。

お互いに多忙なスケジュールであるし、私は夜勤、一方は当直ばかりでなかなか会うことはできませんでした。しかし、すでに電話だけでかなり盛り上がり、初めて会う前からお互いの家族に会う約束までできていました。そうやって電話だけのやり取りから2ヶ月あまり後に初めて会うことができ、それから交際が始まったのです。相変わらず、仕事が終わってから母の病院に通う毎日の中、勘のいい母はすぐに私の異変に気付きました。私としては結婚が決まってから話したかったですすが心配性の母は、自分の病状が思わしくないのにもかかわらず、私のことを気にしてしつこく何があったのか聞くので隠し通すわけにはいきませんでした。

「付き合っている人がいるの」と白状すると「どんな人？」と聞きます。「実は、お母さんが知っている人！」という心当たりがない様子でキョトンとした表情をしました。そして、初めて名前を出すと心から驚いた様子で弱っている心臓に負担がかかるのではと心配したぐらいでした。その告白から一週間後、母は無理に外出願いをだし、三人で食事をしました。これまでは患者と担当医という形で対面していたのが今度は、結婚相手の母親と婿候補という形で会うことになり、お互い照れ笑いを隠せない様子でした。その時に、彼は結婚を前提に付き合っている事を話し、近くに住んでいる彼の姉家族に紹介したいと話してくれました。時は三月、彼の希望は、結婚はその年の秋ぐらいという話で、彼は母に深く頭を下げ、その場で結婚の了承を取り付けてくれました。母は大好きな主治医と大切な娘の結婚ということで喜びはひとしおだったと思います。想像もしていないことだったでしょうが自分が縁むすびになったこともうれしかったようです。ましてや娘は嫌っているが相手は社会的地位の高い医師という職業です。親戚一同もろ手を挙げて賛成したといたいところですが、現実はそうもいきませんでした。母は結婚を了解してくれましたが、親戚が結婚に躊躇する理由がありました。彼は身体障がい者だったのです。9歳の時に交通事故にあいトラックにひかれ、左足が太もものあたりからないと彼と初めて会ったときに聞いていました。主治医の時から多少歩き方に偏りがあり足が悪いのではないかと想像していましたが切断しているとは思っていませんでした。彼の話から、その後ずいぶん苦労したと聞かされ、大変な思いをしたのだと尊敬するほどでした。

小さい頃は、心ないいじめにもあい、悔しい思いも数え切れないほど経験したようです。それにも負けず、夏は海では片足で泳ぎ自転車も乗っていたようですからたくましいものです。医師を目指したのも自分が怪我による入院でお世話になった医師の姿を見たことに影響を受けたものでそのような過程から、患者さんたちに絶大な信頼を受けている理由がよく理解できました。私は、母が聴覚障がい者ということもありそのことに対して深くとらわれることはありませんでした。自分の障害に負い目を感じている彼はなかなかその部位を長い間見せないように隠していました。ある日私は彼にこう言いました。「昔夫婦は一つにつながっていたという神話があります。その時、手が四本、足が四本あったそうです、私たちは、手が四本、足が3本なのよ。私に恥ずかしがって隠すことはしないでほしい。私があなたのなくなった足になるから」と言ったのを今でも覚えています。それ以来、彼は気を使わなくなり、私に隠さなくなりました。

別離

当時、母はすでに集中治療室から出られなくなっていました。それでも、体調の良いときに実家に戻り、私の結婚の報告を祖父母や親戚に話し、許可をもらいました。自宅にお見舞いに来てくれた昔からの自分の友人にそれは自慢そうに話している母の姿が今でも忘れられません。そんな無理が影響するのも当然なことで、三人で対面してから2週間余り、

ある日職場の病棟に母の入院している集中治療室から連絡がありました。母がかなり危ないとの連絡でした。私は師長に報告をして、急いで病院に向かいました。

母が長い間患い、病状が思わしくないのでわかっていましたが、心のどこかでは母に限りて私を置いてなくなるなどあるはずがないと強く思う気持ちがあり、現実が直視できないでいました。祖父母にも連絡を入れると電話先で祖母が泣き崩れるのがわかりました。叔母や伯父も駆けつけてくれることになりました。病院にたどり着くと呼吸が苦しいうな母の姿がありました。もう、話をするのもつらそうです。それでも、「こうしてはいられない。聡美の結婚衣装を作らない」と鼓舞するようにつぶやいています。洋裁師であった母は、私の願いでウエディングドレスを自分で作ることに決めそのデザインを一緒に考えていました。

苦しい息の中で苦しいとは一言も言わず、ただただ私のことだけを心配しています。たった一人の娘を置いていくわけにはいかないと強く思っていて、なんとしても娘をちゃんと嫁がせなければならぬと、そればかりを時々遠のく意識の中で思っているのがわかりました。何とか息のあるうちに、母が心の底で思っている弟に合わせたいと、初めて弟の自宅の電話番号を人づてに教えてもらい電話を入れました。電話は義理の母が出ました。私が手短かに用件を話すと弟に変わってくれ、何年振りに弟の声を聴きました。弟が高校時代に家出してきたときに話した依頼でした。「もう最期だからあってほしい」そう話しましたが、弟は全く興味がないようで「来ない」と言いました。家から病院までは車で

2時間はかかります。それでも何とか来てほしいと再三、お願いしましたが徒労に終わりました。

病室に戻ると私が弟に電話をしたことを察し、「もういいよ」と悲しそうにあきらめた表情でつぶやきました。小さい頃より母に捨てられたといわれて育った彼の心は氷のようになくなっており溶かすチャンスもなかったのかもしれない。成長するにつれて何回か会うことがありそのたびに、母が捨てたのではないと説得しましたが氷のように冷たい表情から納得していかないことがわかりました。そして家長の伯父に「あんちゃん（お兄さん）」と二度つぶやいたのが母の最期の言葉でした。それは、伯父に私を頼むという言葉であることは誰にでも理解できました。とうとう、私は一人になりました。母が亡くなったとき、自分も半分死んだと感じました。苦労ばかりの人生でした。親孝行など今からしてあげられると思った矢先でしたし、私の晴れ姿を見せてあげたかった。できれば、子供好きの母に孫の姿を見せられたらそれは一番の親孝行だっただろうと思わずにはいられませんでした。

危篤を聞いて彼も駆けつけてくれました。その姿を見て驚いたのは周りにいた病院関係者ではなかったでしょうか。かつての主治医が担当ただけで、以前の病院へ患者に会いに来ることはよほどのことがない限りありません。看護師たちはいぶかしがり、一瞬騒がしくなりました。私と二人並んでいる姿に驚きを隠せない様子でした。母を病院から連れ出すときは、彼は私の隣にいて私の家族の一員として病院関係者に一緒にお礼を言っ

くれました。伯父叔母たちと会ったのもこの時で、やはり私が彼に最初に会ったときと同様、最悪な初対面でした。

これが、前半の私の人生です。

その後

それからは、全く違う人生を歩むことになりました。四人の子供に恵まれ、念願の大学教員になりました。順風満帆な人生と人は見ると思います。主人の開業から、また新たなステップに進み、私は不本意ながら経営に携わることになり、今があります。実際、自分が経営に携わってみてこれほど大変な仕事があるだろうか？と何度も思いました。入居施設は二四時間休むことはなく、どんなに細心の注意を払っていても、認知症もあつたりして、転倒することもあります。移動時に自分でぶつけて内出血をすることも避けられない時もあります。でも、すべての責任は施設側にあります。大切なご家族を預かるということは、毎日が真剣勝負で一切の手抜きなどあつてはならないのです。時代は、大変な高齢化社会を迎えようとしています。入居者のキーパーソンが認知症のご家族だったり

することもありますし、少子化ですのでご家族が少ない方もいらっしゃいます。昔と今は、「親を見る」という概念が違ってきていると言わざるを得ません。施設の力量、質、人材がこれから一層求められます。「高齢者介護」が世の中に求められ、新たな施設がどんどん建っていきませんが、運営は困難極まりないと思っています。

今は医療介護業界以外の異業種、たとえば建築業などが参入したりする場合が増えていきます。営利を求めるとそれは即、人件費削減となります。人件費を削るとたちまちサービスの質は落ち、よいケアができなくなり、転倒などの事故も増え施設から出ていきたくい退所を希望する方も増えていきます。もともと介護事業は儲からないといわれている中で生き残りをかけ、理想を追い求め経営を続けることは大変なことです。介護職スタッフは他業種からの移籍組が多く、接遇も教育レベルも一様ではありません。基礎から指導しなおすこととなります。そのうえ、転職も多いのでやっと一人前になったと思ったらヘッドハンティングでよそに移る場合もあります。

そのような経営を何とか六年も続けてこれたベースは、思い返すと自分の育った環境と母の影響があると思うのです。多くの方に助けられ無事大人になれました。国や県・市の奨学金という制度があり十分な教育も受けられました。子供のころより母がなくなったら施設に行くのかもしれないという危機感を感じていました。

今までの社会への恩返しが今の経営方針や理念に含まれています。好きで貧乏をしているわけでも障がい者になつたわけでもありません。一生懸命生きてそして高齢者になつた時にその終の棲家として、安心、安全、楽しく孤独ではなく幸せな生活を送ってもらいたい。働くスタッフも楽しく充実した勤務を続けてほしい。私は、若い時に母を亡くしてしまつたし、祖父母も介護するチャンスはありませんでした。自分にとっては、入居者・利用者が大切な家族でありご縁があつて入居されていると思つています。「終わりよければすべてよし」という言葉があります。最後のステージは、最良のステージでありたい。高齢者には「明日がない」場合もあります。毎日、最善を尽くす。それがいつもスタッフに話していることです。

ミセス日本グランプリ

そのような環境にある私がない、華やかで場違いなミセス日本グランプリに応募したかという、一つはそのコンセプトに惹かれたからです。単なるミセスコンではなく、社会貢献を大きく打ち出していること、子供のころ、寂しい思いを唯一、母が猫を飼うことを許してくれそばにいてずっと紛らわせてくれました。ですから動物愛護にも大変興味を持ちました。また、今、私は母が亡くなつた年齢になりました。この年齢をクリアできるのか

不安もあり、何か大きなものにトライしたいという気持ちもありました。それ以外にも、高齢者になる楽しみが少なくなりそうです。毎朝顔を合わせている私が全国大会に臨むということも皆さん方の楽しみになっていただきたいという思いもありました。高齢者施設という暗いイメージが付きまといまいます。そうでなく、明るく元気で華やかな部分もあっていいのではないかとも思いました。

審査の結果は、最終の本選まで残りしました。私は本選まで残るとはつゆほどに思っていないので、忙しい仕事の合間に本選に向けたスピーチのレッスンを受けて、歩き方を練習したりということは大変でした。もともと大変だったのは、本選前のレッスン時、代表から体重を4〜5kg絞るように言われたことです。ただでさえ、標準体重以下でしたがそれは、私にとってはモデル体重でした。おそらくバストがあるので太って見えるのかもしれない。二か月で痩せることはともすればやつれることになります。それは本意ではありません。綺麗に痩せるために、運動と食事制限を厳守し、お陰で本選まで絞ることができました。

本選への出発の前日は、スタッフや利用者から応援メッセージをいただき、一生に一度の思い出づくりという事で出かけました。グランプリには届かなかったのですが、全力を出し切ったこと、皆さんが評価してくださったことをうれしく思います。一生の良い思い出になりました。そして、その後の働くパワーにもつながっています。でも、ミセス日



本グランプリの本分は、コンテストではなく社会貢献です。楽しく華やかにでも社会に恩返しをする。九州地区は美しく素晴らしいメンバーが何人かいます。その方々と一緒に皆さんが喜ぶようなことをやってみたいと計画しています。

これからは女性の時代です。女性の品位や美、やさしさ、思いやり、気配り、優雅さを保ちながらも世間で活躍する多くの女性たちがおそらく新しい時代を作っていく一員を担うと期待しています。その一助となりたいと切に願います。

古田聡美